祭文補親判六冊
御平太武家六冊

へ4
988

早稲田大學圖書

門 ヘ5 1
號 988
巻

祭主輔親判哥合

月　　五月雨　　池　　菖蒲

瞿麦　　時鳥　　螢火　　照射

祝　　恋

作者

右近少将行経 権大納言長家　　赤染衛門

相模　　東宮学士義忠朝臣

式部大輔資業朝臣　　少納言経家

右馬頭頼朝臣
四条大納言定頼
能因法師
東宮大夫頼宗
式部少輔公資
まけゑさの少将

一番　月

左　勝　四位少将行経　権大納言長家

夜な夜なもすましかりける月影を庭しろくも霜とみえて

右　赤染衛門

やとりける月の光も曇りなき夜の空らくすみわたりけり

二番　五月雨

左　勝　相模

五月雨の水のみまされ [illegible] わたりしかねつ

右　東宮学士義忠朝臣

五月雨の [illegible] けれ

三番　池

左　　式部大輔資業朝臣

千代とのみおなしこゝろをすまれて池のこゝろにまかせたるかな

右　勝　　少納言経家

年をへてすむへき君かやとなれは池の水さへのとけかりけり

右勝

四番　菖蒲

左　　右馬頭良頼朝臣

あやめくさひくてもたゆくなかきねのいかてあさかの沼におひけん

右　　東宮大夫頼宗

昔よりつきせぬものはあやめくさ（さ）つきさつきのねにはありけり

五番　瞿麦

左　勝　　四条大納言定頼

とこなつの花さく庭はかくれなくかれぬ色もこすとそみる

右　　赤染

庭の面にかくのこきとおもふらんとこなつの花にかはれる
さくと庭あるゝとはしらまへしとて　左まさる

六番　時鳥

左　持　　義忠朝臣

鳴なくにまつにまさるゝ新なまつるやまさとなく新なる

右　　　　赤染

夜もすからまつる物をほとゝきすなかぬにかゝるさよのふけゆく

七番　螢火

左　勝　　　　右馬良経朝臣

沢水に空なる星のうつるかとみゆるは夜はの螢なりけり

右　　　　赤染

なつくさの五月のやみにまかひけりはなの螢はまつひかりけり

八番　照射

左　勝　　　　式部大輔資業

五月やみ山のはまつに見えぬるはほくしのともしやまかけのしか

右　　　　赤染

五月やみともしにかゝるさをしかのめをみてのみそしかしりにける

右哥あしくは輔親そいさゝかなるに左人々にくしといはれけるやうそよきかなとみえしさることからともしかぬるさとよ

右哥はよろしからすさるにても左はなやかにまさりさう候よしつてすまひ（ひ）つらいぬとてもしかへとさいふや

うたしとかせは輔親もまたにうたかしとの

えくありかしさはれとかくれりまたしもしのはれ

なきさもにしは右まけたりともよき

九番　祝

左　能因法師

君か代は白雲かゝるつくは山みねのつゝきの海となるまて

右　勝　まさかきの少将

思ひやれやをよろつよの君をいはふ心はいのちいのり代

左ことはの海となりうきのむとなりたる

事のなし海そうらみは山まくあるへきそ

まうらめとて

十番　戀

左　能因法師

しるひとの身にかくしもぬ立まとて人つまこひしくはまかせて

右　勝　春宮大夫頼宗

あはれとも世をそ命のかれはこひそ人の

いのちなりけれ

経平大貳家歌合

應徳三年三月十九日

題

春駒　桜　郭公　水鶏

萩　月　鴛鴦　雪

恋　祝

判者
通俊朝臣

一番　春駒

左　勝

まきのたちのあれのゝこまはけふよりはひきてあそはむあれたつきみ

右

あかてむまやみなれはまそみえつまてさゝきまつれなれはあかり

判云あきみなり野のあはれまさりつのくむ春のまさるなり

左の哥をまさるとてきこゆのすこしまさりてい

つるなとしみえれとはてきたしさいかれ

とちのまさるむことなき人の哥なれ

きこえんむこまもこそいはゆるなしいふこと

世乃なへまて越ろうしきをきくもれと右
乃哥乃あしけなけれと聞ひらりらた
ハ千まき云のやまり叉やまひとやまをつらん

二番　桜

左　勝

さくら咲春の山そは雪ときえぬ越の中の梢の色ちをれ

右

山さくらちるなりけれ白雲乃きえぬ世なき春とみえけられ

判云咲まきる白雲みえぬ桜花のまてあらま義

左の哥右のうたをまさる越へしとさふしきれと

あらそこしの花ゝ称河ちハきれ世ぬみよゝきそさ
なくとよめくとひ千まき云ちさきり

三番　時鳥

左　勝

郭公あらそとしあらみ聲つけ夜さうを山のまえよひとよ

右

きみされぬなかなるをまや時鳥あるなやもとれせさらん

判云きれうその山時鳥さえく聞きれせなえをされら夜ん

左の哥をうさくことあらまて聞しはしをとあら

しうたをみとまやあらんとおはえくまとたしうま

共にしもあはれなれどもさもあるへし　右の歌は
有明の月はたゞありあけの月をまちて
またしらぬことをあはれのことにせん
まことにいひて

四番　水鶏

左

夜もすがら我宿の戸をたゝくなる水鶏の

右　勝

明ぬるを月よをたゝく水鶏かな

判者　左の歌はさもあはれにきこゆるを右はまさりけり

左の歌はつゆのしたにおきつるに

またしらぬ所にひきしく

五番　萩

左

秋萩の花のこぼれて露のまにまに

右　勝

まろ寝する秋の野べにこぼれ萩

判者　左はいとわかくしてみゆ

たのむかたのしらぬものにて

かたしきもなさけもなし

たゝまみなれたるしけなし右の哥の詞も
おほ空もいとおかしくおもひよりたるさの
ましさもおほえ侍りしつる文字こそこの文字は
しるさきはけるにいへる哥のこゝろせら
まされるさしもきこえ侍るとおほえひされる
こゝろせられてまさ

六番　月

左　勝

月みては秋なるまゝのなかきよはこゝろのおくもやくもまかはん

右

みな人の心は月のひかりまてはさつあひならひかりなり
判云左の哥は月ハかみやまさみなおなり
左の哥の秋なるまゝのといへる心よりの哥はまた
まことつきの心をくみたる左の心おほくきん
右の哥の心は月のひかりにまちさかんさ
のちにれたる哥ははなんわかまゝにまん山のそと
いさまれひかりまてつさとはまさかやまの月と
まさむしいへるてへんさしまちたる
くまそつねにはみおなる哥とおもひたまへたち
まやかれは人の心おもしむおほまりはまちたると

ことわりなんこの心にはあらまほしき

七番

左　勝　鴛鴦

うきねする夜はさへはらふをしの上毛におきそふる霜のあはれ

右

山河に心をくたく秋の夜にみなかみさえてをしやあるらん

判云山河の水さへはらふをしの上毛におきそふらんはあはれにさこそあらん

左の哥はよくきこえはへるにや霜のおきそふるあはれも

かなしくおもはれて侍るに影をならむこゝろ

まされることはして左をさきとすへき侍る

ゆく人はしらし右の哥にまさることはなき事

ところあるやしもそはいひえたる心ありける

うきなるをいはんやおもかけの山の峯はせきら

ぬよるやいつこに人ひとめにまかれとひみれ

なり

八番

左　勝　雪

難波江の芦の葉やまよふ雪をれは芦のふしのまこえさらきなり

右

物にせん夜をさむくふらむ雪けまかれたえすなをれる書きる雪

判云右こそ白雪ハけさしも跡なくなりたり
左の哥こそ人しれぬ心なき所そ
されの部にとふらひ侍ると思へるそ
きなきさまひつくハ右の哥のあさましみ
こゝろもむくなきと思ふよの心ひしたるや
うなりうちこれハなき心なるも深くこのた
きなきといてまかしらんまさまさなくい
りなむてかなん

九番

左 持　恋

人しれぬ思ひに年のへぬるかなかなしきはたゝいつまてや恋しなん

右

恋しなハ面影にやまれんしられすそまとはむとはいはれまし

判云恋しぬる心ハ遠き所にハ伝まさ御みえなかりけり
左の哥ハ人しれぬ思ひに年へぬとおもふま
いひかなしらま事なりこれのをしるハなき
思ひつくしてそ云るさうハあるまし事なれは
や右の哥ハ部の心にいひなきといふ事思
ふしと心あまり人なる事ハたゝしきなきに
かハりきやうの事をいはつきまやそれなれは

のとさえはおもしけまもうたにのみゆるおもしき
まさり

十番　祝

左　勝

春の代は松にもとまる千代の色をそへてことふきそする

右

春の代やさかゆる代々のかきりなく千代をかさぬるまつとまつらん

判云左は松も千代をかはらぬ緑の春をことほく計
左はさしも　右のやさしきよるかたなきを
まさりはへるにあらそひなし

午ゝ午。百文廿

ア